

2025年3月2日大齋前主日

出エジプト記 34章29-35節

コリントの信徒への手紙二 3章12-4章2節

ルカによる福音書 9章28-36節《37-43》

3月になりました。教会暦も大齋前主日となりました。今週の水曜日から大齋節に入ります。大齋前主日の福音書は、マタイ、マルコ、ルカと異なりますが、内容は山上の変貌のお話選ばれます。旧約日課と使徒書はそれぞれ異なり、C年である本日の旧約日課は、出エジプト記にある十戒授与のお話です。ただし、二回目に十戒の板をいただくお話です。一回目は、山に登ったモーセの帰りが遅いので、待てなかったイスラエルの人々が、金の子牛を造って拝んでしまい、それを見たモーセが、「宿営に近づくと、子牛の像と踊りが目に入った。そこで、モーセの怒りは燃え、手にしていた板を投げつけ、山の麓で打ち砕いた」(出エ 32:19) のでした。

イスラエルは主なる神様の選ばれた契約の民であり、その民の証の一つが律法です。その律法の象徴的存在が十戒の板です。その授与の場面ですから、『聖書』の中でも有名かつ劇的な場面の一つといえます。しかし、その大切な場面において、イスラエルの民の大きな失敗があり、それでもモーセのとりなしによって、主なる神様の許しがあり、二回目の授与がある。そして、イスラエルは歩み始めた。この十戒授与に関する出来事だけでも、主なる神様の愛の深さが示されます。イスラエルの選びとは、決してイスラエルが優秀だからではなく、主なる神様が愛を示すためなのです。イエス様の山上の変貌の個所とこの旧約のお話が組み合わされているのは、山上の変貌にモーセが出てくるからということもあると思いますが、様々な形で、主なる神様の愛を知るためだといえます。

さて、本日の個所の直前には、「そして、主はモーセに言われた。『これらの言葉を書き記しなさい。これらの言葉に基づいて、あなたと、またイスラエルと契約を結ぶ。』モーセはそこに、四十日四十夜主と共にいて、パンも食わず、水も飲まなかった。彼は、板の上に契約の言葉、十の言葉を書き記した」(出エ 34:27-28) とあります。モーセは、主なる神様と40日ともにいて、そしてその教えを石の板のうえに書き記します。この40日という日数が、イエス様の荒野の誘惑にもつながる日数であり、また今週からわたしたちも向かう大齋節の本来の日数でもあります(主日を除いて数えていますので、主日を入れれば46日です)。もっとも、40という数は、『聖書』において、「長い」あるいは「ひとつのまとまった」ことを暗示する数ですので、実際の日数が40であったかどうかは不明です。いずれにしても長い期間、モーセは主なる神様と対面していたのです。

主なる神様と40日向き合う。このような出来事は、人間としては大変珍しい事柄です。それゆえに、モーセは特別な人間となり、イスラエルの指導者になるのですが、そのモーセについて、同じ29節後半は「**モーセは、主と語るうちに彼の顔の肌が光を帯びていたことを知らなかった**」と説明されています。モーセの顔がなぜ「光を帯びていたのか」すなわち光っていたのか理由は分かりませんが、この現象は聖書の中でも有名です。それゆえに、この場面は、様々な絵画にもなっており、その一部には、モーセの顔から角のような者が生えている姿でも描かれています。それは、輝くという意味のヘブライ語は、角をも意味するからです。そもそも、放

つ、飛び出ると言う意味も持つことから、どちらでも正解なのですが、字義通りに角を描いてしまうのは、文字からイメージを起こして描く、画家の苦労が予想されます。ただし、その輝きを見た人々について、「アロンとイスラエルの人々が皆モーセを見ると、彼の顔の肌が光を帯びていた。それで彼らはモーセに近づくことを恐れた」（出エ 34：30）と表現されていますので、漫画の描写のように少し怖いような角で示すのも、間違っていないといえるかも知れません。

また、この「光」のためにモーセは顔の「覆い」をかけるのですが、この「覆い」について本日の使徒書も触れています。ただし、旧約自体は「覆い」について、モーセがイスラエルの人々に語り終わると「顔に覆いを掛けた」（出エ 34：33）、主と語り終わって出るときまでは「覆いを外していた」（出エ 34：34）、再び主と語るために中に入るまで、「顔に覆いを掛けた」（出エ 34：35）としており、主と会うとき、イスラエルの民に語る時は、「覆い」を外していたと記しています。誰とも会わないときだけ「覆い」をかけていた理由は分かりませんが、モーセは、見ることのできない、見たら死んでしまう主なる神様と、「覆い」することなく出会い、その主なる神様の光を帯びて、光る顔となったままで、イスラエルの人々に語り掛けたのです。まさに、主なる神様の栄光を、言葉だけではなく、言語外の効果を用いて示していたといえます。

しかしながら、本日の使徒書でパウロは、「モーセが、やがて消え去るものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、顔に覆いを掛けたようなことはしません。」（二コリ 3：13）と述べ始め、「覆い」が古い契約の象徴であり、またキリストにあって取り除かれるものであると述べます。これは明らかに、出エジプト記の意図とは異なります。「覆い」すなわち何かを「覆う、隠すもの」という意味の機能にのみ集中し、イエス様によって隠されたものが明らかになったという主張のために、マイナスの事柄と解釈したのでしょう。このパウロの旧約引用は、旧約釈義としては間違いといえますが、解釈としては問題ありません。なぜならば、出エジプトの二回目の十戒授与の出来事とイエス様の出来事の主張は共通しているからです。

初めに触れましたように、本日の旧約日課、二回目の十戒の授与の出来事は、本来は許されない罪を犯したイスラエルの人々（そのために滅ぼされた人々はいませんが）に対する許しです。それは、主なる神様の愛です。その愛を光が象徴し、それがモーセの顔の光です。言い換えれば、モーセは、光として主なる神様の愛を受け、その愛を民に示したのです。パウロがもう「覆い」はいらないと語ったのは、それがいらなくらい分かりやすく、主イエス・キリストがその愛を、人間として神の子として示してくださったからです。

また、イスラエルの人々がもとめたのも光でした。ただし、黄金の子牛の輝きをそれだと勘違いしたのでした。金の飾り物をみんなで出し合って協力し合って作ったので、余計に輝いて見えたのかもしれませんが。しかし、それはイスラエルを導く主なる神様ではありませんでした。イエス様も同じです、病をいやし悪霊追放の力がありますが、人々が悪と思う存在を滅ぼす力を示す方ではありませんでした。むしろ、十字架という敗北の死でその生涯が終わりました。しかし、姿の先に真の平和と希望がありました。そこからまことの愛が示され、まことの光があり、そしてまことの希望がありました。そのことあらためて、様々な形で、これから始まる大齋節に学びたいと思います。